

東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について (四)

－平成8年4月別置本目録増改訂プロジェクト設置以前－

大 原 理 恵

はじめに－静かな組織体－

昭和63年貴重図書等選定委員会が設置され、東北大学附属図書館内部における貴重図書についての制度が整備された後も、貴重図書をめぐる状況は変転を続ける。本稿では、平成8年4月「別置本目録増改訂プロジェクト」設置以前の動きを確認しておくことにしたい。このプロジェクトにおいて平成17年度版『貴重図書目録』は編集されたが、その前提となった状況を把握するためである。この時期は、大学（図書館）において「電子化」¹と「公開」²促進の動きが強化された時期であったといえよう。

この時期の東北大学附属図書館における貴重図書に直接関係する大きな動きは、貴重図書の保管場所と体制の変更である。平成元（1989）年11月本館2号館が竣工し、平成2年5月に開館した。貴重書庫は2号館に移された。新たに置かれた第二閲覧掛は、貴重図書と雑誌という全く異質な資料を担当する掛となったが、専門ではないとしても貴重図書担当の掛が明確になるという点では画期的であった。

またこの時期、狩野文庫・漱石文庫等のマイクロフィルム作成事業が行われた。そのことによって貴重図書の一部のマイクロ化と目録の電子化が行われたことになる。それは、貴重図書の利用のあり方を変えて行くものとなる。

そのころ、組織としての大学図書館は、大学構成員からも「静かな組織体」と見られていた。それは当時の図書館の静寂な閲覧室や書庫の印象からもたらされたものであったかもしれない。菊地和聖附属図書館長（平成3年12月－平成6年11月在任 経済学部教授）は退任後に顧みて、実態との落差の大きさを次のように述べている。

図書館長に就任する以前、ひとりの利用者として見ていた図書館は、毎日、特に変わったこともなく、日常業務を淡々と処理している静かな組織体というイメージでした。 p1

館長就任前には、日々、平穩に過ぎていると思っていた附属図書館ですが、実際には、その管理・運営をめぐって、次から次へ、さまざまな問題が生起して、毎日、その処理に追われっぱなしでした。 p2

「図書館長の3年間を顧みて」菊地和聖

『木這子 東北大学附属図書館報』20巻1号（通巻71号）東北大学附属図書館 平成7年6月
吉岡昭彦館長（昭和57年12月－昭和60年11月在任 文学部教授）も退任時にこの「落差」に言及し、大学の諸矛盾が図書館に集中する事態を指摘している。

在任中、大学内外の方々から、しばしば「図書館長は優雅な管理職でしょう」という趣旨のことをいわれました。しかし現在の行財政改革の下では、決してそうではありません。むしろ逆に、図書館は大学の中で最も弱い部局であり、現在の大学がかかえている諸矛盾を一身に背負った存在であると思います。

1 『東北大学百年史』四部局史一（平成15年5月刊行）第三編附属図書館において、昭和62年－平成13年を対象とした第四章は「電子図書館に向けて」と題されている。

2 「大学図書館の公開」湯浅富士夫（閲覧課長）『木這子 東北大学附属図書館報』11巻2号（通巻42号）昭和61年8月 参照

「図書館長の任を終えて」吉岡昭彦（文学部教授）

『木這子 東北大学附属図書館報』10巻4号（通巻40号）昭和61年2月 p2

その状況において「図書館長は優雅な管理職」と見做されるのは、大学構成員であっても実態の理解が浸透していないことを示している。図書館長は、無理解な構成員に囲まれて、附属図書館側の諸問題の解決を訴えなければならない立場にあるのである。

※本稿において示す貴重図書に関する制度等は、その後改変されている場合が少なくない。また本稿には、図書館員が私的に業務のため作成した心覚えや筆者の手控えや記憶による記述も含まれていることをお断りしておく。なお附属図書館総務課に問い合わせたところ、本稿で言及した委員会等の公的記録は現在総務課では保管されていないとのことである。

附属図書館長のあり方

図書館長のあり方には大学における図書館の存在が象徴的に表われる。本稿では「前提状況」の一つとして、附属図書館長を取り上げておく。昭和50年12月、和田正信工学部教授が第十四代附属図書館長に就任した。初の自然科学系学部所属の館長である。このことは大学における図書館の位置づけが大きく転換したことを象徴するものといえるが、和田館長は新たに刊行を開始した図書館の広報誌『木這子』第1巻第1号巻頭文においてその意義を強調している。

初代の館長が理学部の林鶴一博士であったことを除けば、大正13年以來ずっと法文学部、さらに文教法経・[ママ]学部の教授が交替で館長をつとめてこられた。本学ではこれが当然のこととして受けとめられてきた。

しかし、図書館の規模が大きくなり、内容が充実してくるにしたがって、学内共通経費に依存する図書館経費が大きくなり、図書館に対する自然科学系と人文社会科学系の理解に食い違いが現われだしてきた。

（中略）このため全学の図書館という認識にたつて自然科学系も図書館運営の責任の一端を担うことになり、その役目が私にまわってきたものと考えている。

「館報の発刊に寄せて」和田正信

『木這子 東北大学附属図書館報』1巻1号（通巻1号）昭和[51]³年4月 p1

和田館長の次の自然科学系の館長は勾坂馨第十八代附属図書館長（医学部）が昭和63年12月就任、その次は第二十一代小田忠雄館長（理学部）が平成9年12月就任している。それぞれの就任時の広報掲載の文章を見ると、むしろ控えめに自然科学系教官の本館自体の利用は少ないことを述べている。

12月1日付けで附属図書館長に就任いたしました。（中略）もともと本館は文系4学部の利用頻度が格段に高く、館長も文系の方が担当し理系では過去に工学部の方が担当しただけと聞きました。

「館長就任に当たって」勾坂馨

『木這子 東北大学附属図書館報』13巻4号（通巻52号）平成元年2月 p1

理科系教官の大部分の方々も同様だと思いますが、本館を利用する機会はこれまで殆どありませんでした。

「附属図書館長に就任して」小田忠雄

『木這子 東北大学附属図書館報』22巻3号（通巻80号）平成9年12月 p1

【表1】は東北大学・九州大学・東京大学・京都大学の歴代附属図書館長の一覧である。東北大学附属図書館では小田忠雄館長任期中に新たに副館長が置かれることになり（平成12年12月1日

3 奥付には50年とあるが、51年の誤りか。

【表1】

	所属	在任期間
初代 林 鶴一	理学部 (数学)	大5.6.9-大13.7.30
2代 武内 義雄	法文学部 (中国哲学)	大13.7.31-昭4.9.9
3代 村岡 典嗣	法文学部 (日本思想史)	昭4.9.10-昭12.11.29
4代 石原 謙	法文学部 (哲学)	昭12.11.30-昭15.9.29
5代 小宮 豊隆	法文学部 (ドイツ文学)	昭15.9.30-昭21.5.29
6代 高橋 穰	法文学部 (倫理学)	昭21.5.30-昭22.3.30
7代 木村 亀二	法学部 (刑法)	昭22.3.31-昭25.11.29
8代 三宅 剛一	文学部 (哲学)	昭25.11.30-昭28.11.29
9代 中村 吉治	経済学部 (日本経済史)	昭28.11.30-昭33.11.30
10代 世良晃志郎	法学部 (西洋法制史)	昭33.12.1-昭38.11.30
11代 金谷 治	文学部 (中国哲学)	昭38.12.1-昭43.11.30
12代 竹内 利美	教育学部 (社会教育学)	昭43.12.1-昭46.11.30
13代 吉田震太郎	経済学部 (財政学)	昭46.12.1-昭50.11.30
14代 和田 正信	工学部 (固体電子工学)	昭50.12.1-昭54.11.30
15代 服藤 弘司	法学部 (日本法制史)	昭54.12.1-昭57.11.30
16代 吉岡 昭彦	文学部 (西洋史)	昭57.12.1-昭60.11.30
17代 塚本 哲人	教育学部 (社会教育学)	昭60.12.1-昭63.11.30
18代 勾坂 馨	医学部 (法医学)	昭63.12.1-平3.11.30
19代 菊地 和聖	経済学部 (会計学)	平3.12.1-平6.11.30
20代 小山 貞夫	法学部 (西洋法制史)	平6.12.1-平9.11.30
21代 小田 忠雄	大学院理学研究科 (代数学)	平9.12.1-平14.11.5

※林 鶴一 明治44.6.14から大正5.6.8まで主幹
 ※『平成20年度 東北大学附属図書館年次報告』により作成
 ※九州大学附属図書館長は「附属図書館の概要」(九州大学附属図書館)により作成
<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/about-us/overview/director>

	所属	在任期間
小川 政修	医学部	大11.7.17-大14.4.20
長 壽吉	法文学部	大14.4.20-昭2.5.27
佐久間 鼎	法文学部	昭2.5.27-昭4.6.18
長 壽吉	法文学部	昭4.6.18-昭6.7.11
豊田 實	法文学部	昭6.7.11-昭9.2.23
西山 重和	法文学部	昭9.2.23-昭11.3.2
春日 政治	法文学部	昭11.3.2-昭13.4.2
佐野 勝也	法文学部	昭13.4.2-昭15.4.18
干潟 龍祥	法文学部	昭15.4.18-昭17.4.20
竹岡 勝也	法文学部	昭17.4.20-昭19.5.18
楠本 正繼	法文学部	昭19.5.18-昭21.6.4
進藤 誠一	法文学部	昭21.6.4-昭23.6.15
金田平一郎	法学部	昭23.6.15-昭24.10.7
進藤 誠一	事務取扱 文学部	昭24.10.7-昭24.12.20
古野 清人	文学部	昭24.12.20-昭28.12.23
栗村 雄吉	経済学部	昭28.12.23-昭32.12.23
青山 道夫	法学部	昭32.12.23-昭36.12.23
北川 敏男	理学部	昭36.12.23-昭42.12.22
伊藤不二男	法学部	昭42.12.22-昭45.2.8
高木 暢哉	経済学部	昭45.2.9-昭48.2.8
松浦 良平	理学部	昭48.2.9-昭49.7.16
田中 武英	工学部	昭49.7.16-昭52.7.15
岡村 繁	文学部	昭52.7.16-昭55.7.15
塚原 博	農学部	昭55.7.16-昭58.7.15
高野 桂一	教育学部	昭58.7.16-昭61.7.15
平嶋 義宏	農学部	昭61.7.16-平元.3.31
市村 昭三	経済学部	平元.4.1-平4.3.31
村上 幸人	工学部	平4.4.1-平7.3.31
小山 勉	法学部	平7.4.1-平10.3.31
有川 節夫	システム情報科学研究科	平10.4.1-平14.3.31

	所属	在任期間
末岡 精一	文学部準講師	明14.8.5-
田中 稲城	文学部準講師	明15.3.4-明15.7.22
谷田部梅吉	理学士	明15.7.22-明16.12.11
松井 直吉	理学部	明16.12.13-明18.11
木下 廣次	法科大学	明19.3.9-明22.10.23
宮崎道三郎	法科大学	明22.10.23-明23.3.24
田中 稲城	文科大学	明23.3.24-明26.9.6
和田 萬吉	文科大学	明26.11.7-大12.11.29
姉崎 正治	文学部	大12.11.29-昭9.3.30
高柳 賢三	法学部	昭9.3.31-昭15.6.14
市河 三喜	文学部	昭15.6.15-昭21.10.4
高木 八尺	法学部	昭21.10.5-昭25.3.30
高木 貞二	文学部	昭25.3.31-昭28.4.9
末延 三次	法学部	昭28.4.10-昭35.3.31
岸本 英夫	文学部	昭35.4.1-昭39.1.25
伊藤四十二	薬学部	昭39.1.26-昭44.3.31
松田 智雄	経済学部	昭44.4.1-昭47.3.31
今井 功	理学部	昭47.4.1-昭50.3.31
安藤 良雄	経済学部	昭50.4.1-昭53.3.31
藤原 鎮男	理学部	昭53.4.1-昭56.3.31
裏田 武夫	教育学部	昭56.4.1-昭60.3.31
山崎 弘郎	工学部	昭60.4.1-昭63.3.31
黒田 晴雄	理学部	昭63.4.1-平3.3.31
清水 忠雄	理学部	平3.4.1-平6.3.31
開原 成允	医学部	平6.4.1-平8.3.31
六本 佳平	大学院法政治学研究科	平8.4.1-平11.3.31
落合卓四郎	大学院数理学研究科	平11.4.1-平14.3.31

※『東京大学附属図書館概要2013/2014』により作成

	所属	在任期間
島 文次郎	法科大学 (のち文科大学)	明32.11.6-明43.7.25
石川 一	司書官	明43.7.25-明44.10.1
新村 出	文科大学	明44.10.1-昭11.10.19
羽田 亨	文学部	昭11.10.19-昭13.11.25
本庄榮治郎	経済学部	昭14.1.17-昭17.7.28
澤瀉 久孝	文学部	昭17.9.10-昭22.5.31
原 随園	文学部	昭22.5.31-昭24.11.8
泉井久之助	文学部	昭24.11.8-昭32.7.15
田中 周友	法学部	昭32.7.15-昭38.7.14
足利 惇氏	事務取扱 文学部	昭38.7.15-昭38.7.25
堀江 保蔵	経済学部	昭38.7.25-昭41.7.24
穴戸 圭一	工学部	昭41.7.25-昭46.3.31
平岡 武夫	人文科学研究科	昭46.4.1-昭48.3.31
林 良平	法学部	昭48.4.1-昭57.3.31
高村 仁一	工学部	昭57.4.1-昭59.4.1
西原 宏	工学部	昭59.4.2-昭61.3.31
西田 龍雄	文学部	昭61.4.1-平4.3.31
朝尾 直弘	文学部	平4.4.1-平7.3.31
長尾 眞	工学部	平7.4.1-平9.3.31
万波 通彦	大学院工学研究科	平9.4.1-平10.3.31
菊池 光造	大学院経済学研究科	平10.4.1-平12.0.31
佐々木丞平	大学院文学研究科	平12.4.1-平17.3.31

※『京都大学百年史 資料編3』『京都大学附属図書館概要 2006/2007』により作成『概要』では高村は昭59.3.31まで、西原は4.1より

布田勉（国際文化研究科教授）附属図書館副館長就任）、館長の位置づけが異なってくるので、それ以前までを示した。これらの大学附属図書館において、自然科学系教官が初めて（大学草創期等を除く）館長に就任したのは、九州大学が昭和36年12月北川敏男理学部教授、東京大学が昭和39年1月伊藤四十二薬学部教授、京都大学が昭和41年7月穴戸圭一工学部教授であるから、昭和50年12月の和田館長の就任は比較的遅い方である。

本館の位置づけ・分館の状況・地理的条件などが異なるため単純な比較は出来ないが、附属図書館長の所属学部の在り方は、それぞれに特徴がある。東北大学附属図書館長の場合、木村館長以降文学系以外の館長が就任するようになって⁴からは概ね文系四学部で館長を交代し、理系についても工学→医学→理学 というように、部局の偏りが生じないようにするのが原則であるように思われる。文系学部の館長が多いのは本館が文系分館機能を持っていることによるのであろう。本館は川内移転後教養部分館機能も担っていたが、教養部所属の館長が選出されることはなかった。

館長の在任期間について見ると、草創期の林鶴一館長を別にすれば、村岡典嗣館長の在任が比較的長い。東京大学の和田萬吉館長・京都大学の新村出館長のように、特例的に在任の長い館長は東北大学にはない。

東京大学で附属図書館長の選考方法を変更したのは附属図書館「改善」の一環であった。

昭和三十八年九月十七日、新たに「東京大学附属図書館基本規則」が制定された。当時は附属図書館の改善が進められており、その重要な課題のひとつとして全学の図書館機構が検討された。その結果が旧規則の廃止とこの基本規則の制定であり、同時に「図書行政商議会規程」が改正され、また「東京大学附属図書館長選考内規」が新しく制定されることになったのである。

『東京大学百年史』部局史四 東京大学百年史編集委員会編 東京大学 昭和62年3月
第二十六編 附属図書館 p1231

新たに制定された「東京大学附属図書館長選考内規」の「制定理由」では「全学的」見地が強調されている。

東京大学附属図書館長は、従来、総長の推薦によって選出される習わしであった。

このたび、附属図書館の機構と機能が全く新しい観点から明確にされるに及んで、附属図書館長の地位と職務も、おのずと全学的な見地から重要性を加えるに至った。

以上の観点から、従来の館長選出の方法を改め、図書行政商議会を中心とする全学的な選挙母体によって、広く附属図書館長としての適任者を求めるために制定しようとするものである。

同上 p1232 ※「制定理由」からの引用

任期は「附属図書館長の任期は、三年とする。ただし、再選を妨げない。」（「東京大学附属図書館基本規則 第五条」⁵）というものであった。

東北大学の「附属図書館長並に図書分館長選考基準（昭和二十五年三月三十一日施行）」⁶には附属図書館長の選考と任期については次のように定めている。

第一条 附属図書館長は東北大学教授の中から全学学部長の会議によつて選考した者をもつて充てる。

4 「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について（二）」大原理恵 『東北大学史料館紀要』9号 2014年3月 p82 参照

5 『東京大学百年史』資料二 東京大学百年史編集委員会編 東京大学 昭和60年3月 p1077

6 『東京大学百年史』九 資料二 p37

附属図書館長の任期は三年とする。但し重任を妨げない。

重任の際の任期は一年とし、通算五年を超えることを得ない。

現在の「東北大学附属図書館規程（最終改正平成27年9月1日）」では「館長は、総長が指名する理事又は副学長をもって充てる。（第4条第2項）」となっている。

館長の在任期間について、附属図書館広報誌編集後記に次のような記事が見られる。

竹内館長が任期を了えて辞任された。本学附属図書館長の任期は3年であるが、引続き第2期（1年）さらに第3期（1年）と、通計5年まで延長できる。前々館長世良教授（法学部）、前館長金谷教授（文学部）ともに3期5年を勤められたので、竹内館長は本学館長としてはやや早く退かれた感じがする。御停年の関係であればやむをえない。

「編集後記」『図書館通信 東北大学附属図書館月報』94 東北大学附属図書館 1972年1月 p4

「編集後記」が図書館側の意向を反映したものとするれば、附属図書館としては館長の任期がたとえ一年・二年でも長い方が望ましかったということになる。新任の図書館長が図書館の運営について一通り把握するにもある程度の期間を要するであろうから当然ともいえるが、竹内館長のあとに続いて就任した吉田館長・和田館長はそれぞれ4年⁷、その後は3年間在任の場合が多くなる。

ただし、図書館長の図書館や職員への関わりの実態は、制度のみで決まるものではなく、図書館職員側の状況も影響して個人差が大きくなっていくようである。東北大学附属図書館員の座談会記録にはその一端が現れている。初期の図書館長はしばしば図書館に来ていたという。

高木 あ頃は館長はよくこちらに来られましたね。小宮さんになつてから週に何回といふ風になりましたね。

吉岡 館長はこちらに来た方がいい、ですね。

「座談会 図書館の今昔を語る」出席者：伊木武雄・吉岡孝治朗・高木武之介・矢島玄亮
司会：三村雅水 記録：吉田潤之介・佐藤智恵子

『同心』7 東北大学附属図書館「同心」編集部 昭和26年1月 p21

小宮館長はあまり来館しなかったと言われているが、着任当初は司書官が一時空席状態になり、館長が実務の細部についても判断を下さねばならない状況であった。

小宮先生の館長就任と殆ど時を同じくして、それまで館の実務を掌理していた八木沼司書官が退任されたので、事務の細部にわたつてまで先生の直裁を得なければならない時期がしばらく続いた。（中略）先生は実に熱心に事務内容を調べられ、時々主任会議（今の掛長会議）を行つて実情を聴取され適切な裁決を下されるのであった。

先生は後任司書官の銓衡には実に慎重に考えられたらしく、約9ヶ月の空白期間を置いて16年6月に至つてようやく京都から重久篤太郎先生を迎えることができた。

「武内・小宮両先生を偲んで」伊木武雄 『MAUL 宮城県大学図書館協会会報』28 1966年7月 p5

小山貞夫館長（平成6年12月－平成9年11月在任・法学部）は学生時代指導教官であった世良晃志郎館長（昭和33年12月－昭和38年11月在任・法学部）在任当時を回想し「助手として研究生活に入る直前に私の指導教官が偶々附属図書館長に就任したために、館長室で週二日もゼミがあったし、それ以外にも所用でしばしば館長室に出入りしていた」⁸と述べているので戦後も館長室に在室することの

7 ただし、和田館長は病気のため延長できなかったと思われる。『木這子』4巻4号 昭和55年1月 「訃報」p11 参照。

8 「館長退任の辞」小山貞夫 『木這子 東北大学附属図書館報』22巻3号（通巻80号）平成9年12月 p3

多い館長もあったと考えられる。ただ、館長室在室中、館務のみに携わるわけではないのも実態であったのであろう。

本館 2 号館開館

先にふれた東京大学附属図書館の改善には貴重図書の管理 も含まれていた。「東京大学附属図書館改善計画案」(1961年5月)Ⅱ. 改善計画の主要点 C. 中央図書館の改善 1. 業務 f. 貴重書の管理 には次のような項目が示されている。

本館には、多数の価値の高い貴重書が所蔵されている。それにもかかわらず、整備した貴重書閲覧室すらもない状況である。大学図書館のあり方としては、貴重書については、その収集は寄贈にまち、保存と閲覧に重点をおくものとする。この観点から、本館における貴重書の管理と利用方式を確立する。

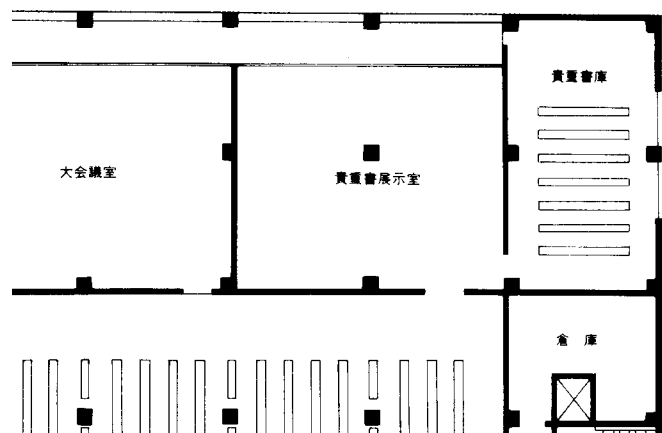
- (1) 貴重書閲覧室・展示室の設置
- (2) 保管・出納の担当掛の設置
- (3) 利用規程の制定
- (4) 貴重書・特殊集書類の書目の作成
- (5) 希望のある場合は、部局図書館の貴重書を保管する。

『大学図書館の近代化をめざして 東京大学附属図書館改善記念論集』東京大学附属図書館編訳
東京大学附属図書館 昭和38年11月 p121

上記の項目が貴重書管理の基本事項であるとするれば、東北大学附属図書館における本館 2 号館の増築(平成元(1989)年11月竣工・平成2年5月開館)は、貴重図書の管理上画期的であったといえる。この増築の詳細は「附属図書館増築に伴う本館・新館の利用計画」(『木這子 東北大学附属図書館報』14巻4号(通巻56号)平成2年2月)及び『木這子 東北大学附属図書館報』15巻1-2号(合併号)(通巻57号)平成2年8月<特集 東北大学附属図書館新館(2号館)完成>に記されており、以下これらによって記述する。

もとより、2号館は蔵書の増加による書庫の狭隘化に対処することが目的であり、増築にともない機能分離を図り、2号館は主として雑誌が配架されることになった。貴重図書の保管場所は2号館となった。【図1】は、2号館平面図より、貴重書庫付近を示したものである。貴重書庫と貴重書展示室が並べて配置されている。平成2年4月1日付で組織改編が行われ、閲覧第二掛が新設された。貴重図書のみを扱う掛ではないが、ともかくも貴重図書を担当する掛が明確に定められたわけである。

これは伝聞であるが、計画段階では、貴重図書の他、古典籍・古文書・個人文庫等、貴重性を持つ資料をすべて2号館に移すことが検討されたが実現しなかった。また、和漢書と洋書の貴重書庫は別に設ける予定であったが、実際には貴重書庫と貴重書展示室の2室になっている。この段階での議論の一



【図1】 附属図書館本館 2号館貴重書庫付近
(『木這子』15巻1-2号(合併号)(通巻57号)平成2年8月) p.7

端は、後に1号館書庫への電動集密書架導入の際にも引き継がれている。

この電動集密書架は、(中略)図書館利用者からすると、(中略)必ずしも全面的に歓迎されるものではありません。二号館新築の際にも、集密書架の利用についてはいろいろ議論があったという話を聞いていました。

特に古典籍は電動書架に馴染まないという利用者の声が強かったというので、

「図書館長の3年間を顧みて」菊地和聖

『木這子 東北大学附属図書館報』20巻1号(通巻71号)東北大学附属図書館 平成7年6月 p3

後に個人文庫の一部と古文書を準貴重書庫に移している(学部学生の書庫入庫に伴う処置)。さらに改築等のため、現状では2号館の配架・利用体制はこの時とは大きく異なっている。

貴重書庫も改修のため、上記と現状とは全く異なっている。筆者の記憶により、以前の2号館貴重書庫内部状況を記しておく、貴重書展示室は大きく二つのスペースに分かれており、一方は展示スペースとされ、展示ケースが常設されており、特別な見学などに利用されていた⁹。もう一方は、保管スペースとなっており、ガラス戸棚が置かれ、古文書の一部、関連文献、マイクロフィルム、貴重図書以外の別置本等が保管されていた。中央には大形の机が置かれ、作業や調査・研修などに用いられた。またこの室は資料撮影等にも使用され、報道機関等の取材撮影も行われたことがある。貴重書庫は、中央の書棚には漱石文庫及び洋書が、周囲の木製のガラス戸棚には和漢書貴重図書が収められていた。

いくつかの問題点はあった。これまで貴重書庫は地下の書庫中央部にあったが、それに比べれば、書庫の状態が外部の気象条件に左右されやすくなる。特に展示室の西側はガラス窓であった。また、貴重図書展示室を設けたのは、当時2号館は事実上一種の書庫であった¹⁰ので、閉鎖的であるべき書庫に開放的であるべき展示室があるのは、矛盾があった。貴重図書を少ない負担で安全に展示できる利点がある一方、不特定多数の観覧者を迎え入れることはできない。

これらが、いかに改善されることになったか、それは改修になった今より数年後の評価を待つて記述されることになるであろう。

なお、さきに引用した「東京大学附属図書館改善計画案」(1961年5月)の「大学図書館のあり方としては、貴重書については、その収集は寄贈にまち、保存と閲覧に重点をおくものとする」という方針については次の岸本英夫館長¹¹の言葉がその説明となっている。

最後に大学図書館は、貴重書にどれ位の図書費を使うべきかという問題が私の頭にありましたので、むこうでいろいろの人に聞いてみました。中には、「貴重書は大学図書館の気品という点からも、是非購入したいと考えている」という人もないではありませんでした。しかし、全体の空気としては、「大学図書館は、あくまで研究と教育がその使命なのだから、殆んどの人に読まれない貴重書の購入に、余分の費用をかけるのは、大学に対して申し訳がない」といったふうのものでありました。ハーバード大学には、非常に立派な新装の貴重書図書館があります。そこの主任の人にたずねたところが、このような設備の

9 「貴重図書の閲覧と公開」湯本智子(情報サービス課閲覧第二掛長)『木這子 東北大学附属図書館報』19巻3号(通巻69号)平成6年12月には、展示室内の写真と室内における展示状況の記述がある。

10 「附属図書館増築に伴う本館・新館の利用計画」『木這子 東北大学附属図書館報』14巻4号(通巻56号)平成2年2月

11 東京大学附属図書館長(1960年4月-1964年1月在任)。大学図書館の「近代化」をめざし、東京大学附属図書館の「改善」を行った。1964年1月逝去。

整った貴重書図書館があると、多数の貴重書が寄贈されるものだ」と云っておりました。(中略)したがって大学としては、貴重書は買わなくても、設備のよい貴重書閲覧室を作ることは必要だと思いました。

「欧米の大学図書館めぐり」岸本英夫(講演 昭和35年10月14日)(初出『医学図書館』7巻6号 1960年)
『大学図書館の近代化をめざして 東京大学附属図書館改善記念論集』第2集 東京大学附属図書館
昭和39年5月 p30-31

ここで研究資源としての貴重図書がほとんど意識されていないのは如何なる事情によるのか詳らかでないが、大学(附属図書館)における貴重図書の位置付けとして注意すべきものと思われる。

貴重図書のマイクロフィルム作製

附属図書館では、別置本のマイクロフィルムを作製する計画があった。目録刊行の結果、増大する複写希望に対応するためであった。

本館には国宝2点をはじめとする貴重本その他で特別の本箱に架蔵されている別置本約830点があるが、それらは本館図書の白眉であってその目録(昭和36年10月増訂稿刊行)の普及に従って、学の内外から閲覧調査の希望が次第に高まって来た。特に最近では稀購の珍本の複写を依頼される場合が多く、本館ではルモー撮影機によってマイクロフィルムを作製しているが、その頻度があまりに高まり、原本の破損をまねくおそれも考えられるので、このほどこれらのマイクロ・フィルムを作製し、そのコレクションを作って、複製の場合はこのフィルムから焼付けて、直接原本をわずらわさないことを計画している。別置本830点はマイクロにして概算15万コマにのぼるので相当長期の計画となるが、交換のためにまた保存のために図書館の全蔵書のマイクロ化の必要(木材パルプ使用図書の寿命は5.60年~7.80年という恐るべき警告が聞かれる)がさげられる今日、当然考えねばならない問題であって、各方面の理解と協力が期待されている。

「本館所蔵別置本のマイクロフィルム作製計画」

『図書館通信 東北大学附属図書館月報』2 1964年5月 p2

この計画は、実現していない。貴重図書全体のマイクロ化は、相当な規模の事業になり図書館単独で遂行するのは困難であった。

昭和53(1978)年文部省の経費配分を受け西藏大蔵経フィルムを作成した。その作業詳細は「東北大学附属図書館所蔵 西藏大蔵経マイクロフィルムの作成」石川亮(『図書館学研究報告』11 昭和53年12月 東北大学附属図書館)に記されている。このときは仙台市内の業者に撮影を依頼し、図書館職員・業者・チベット語を学んだ大学院生・学部生が協力して原本の点検・目録作成¹²・撮影作業を行っている。チベット大蔵経の場合は、原本の取扱の問題がマイクロフィルム作成動機となっている。「周囲が欠落しやすい粗い紙質で、原資料の出納は極度に慎重を要」(上掲p224)し、作品名や頁付を読むため職員がチベット語を学ぶ必要もあったからである。

平成3(1991)年11月25日、狩野文庫マイクロセンター開所式が行われ¹³懸案となっていた狩野文庫のマイクロ化が行われることになった。この狩野文庫マイクロ化事業は平成2年10月から

12 『東北大学附属図書館所蔵西藏大蔵経マイクロフィルム索引』 東北大学附属図書館 1978年

13 以下、狩野文庫マイクロ化事業の経緯については、『木這子 東北大学附属図書館報』16巻3・4号(合併号)(通巻60号)平成4年3月<特集・保存 メディア利用>及び「『狩野文庫目録和書之部』成立の経緯」狩野文庫マイクロ化編集室(『東北大学附属図書館研究年報』28 平成7年12月)による。なお、狩野文庫・晴山文書・漱石文庫のマイクロ化については、『東北大学百年史』四部局史一(平成15年5月刊行)第三編附属図書館第四章第二節貴重資料のマイクロ化事業にまとめられている。

話し合いが本格化し、学内外の意見調整が必要であった。「民活導入によるマイクロ化事業」であったため「文化事業といっても経済性を伴わざるを得」ず「企業側との意見の食い違いを生じることもあり得」た。また学内では「先生方にとっては宝物であり、宝物の保存のためとはいえフィルムにして販売することを了解していただく必要があった」¹⁴のである。

平成2年11月28日勾坂附属図書館長が渡邊信夫文学部長に狩野文庫のマイクロ化を提案し、平成3年3月5日に文系四学部から「狩野文庫の保存と利用に関する要望書」を図書館長宛に提出している。平成3年5月15日附属図書館長が図書館商議会に保存対策を提案、「民活導入による狩野文庫マイクロ化計画及び狩野文庫マイクロ化編集委員会設置を提案し、委員の人選を文学部関係教官に依頼」¹⁵しているが、6月8日段階での委員は文学部教授8名・法学部教授1名・教養部教授1名であり、古典目録編纂事業¹⁶と同様、文学部の関わりが大きかったと思われる。

この事業において狩野文庫の別置本(貴重図書)のマイクロフィルムも作製されたが、事業の対象となったのが狩野文庫和書古典のみであったため、漢籍や近代資料についてはマイクロフィルムがない。平成6(1994)年『狩野文庫目録和書之部』が刊行されたが、この目録のデータは電子化されていた。なお、マイクロ化後の狩野文庫原本利用については、編集委員会としては「原則としてフィルムによる利用になるが、目的によっては原本の利用も考慮する」¹⁷という案であったが、実際には貴重図書以外の原本利用制限は行われなかったようである。貴重図書閲覧・撮影については、「狩野文庫の和書については、マイクロフィルムが完成しておりフィルムで代替できるものは、原資料を提供せずマイクロフィルムの閲覧をお願いしている。」¹⁸という方針で制限されることになったが、書誌調査等必要な場合には原本利用は可能である。ともあれ、マイクロフィルムは資料の複製を容易にした。また、狩野文庫のマイクロフィルム(『東北大学附属図書館所蔵狩野文庫マイクロ版集成』)は幾つかの大学図書館が購入している。それらが相俟って、マイクロフィルムの存在は狩野文庫の利用方法を変えて行くことになる。

同じころ貴重図書以外でも平成3年度から「晴山文書」のマイクロ化が岩手県九戸郡大野村との共同事業として行われた。「晴山文書」の意義及びマイクロ化の経緯は『木這子 東北大学附属図書館報』17巻2号(通巻62号)平成4年10月 <特集・古文書の再発見>に記されている。この事業の経費は大野村が提供した。それは郷土史を知る上で重要な資料である「晴山文書」を複製というかたちで本来の所在地である大野村へもどすことが望まれたからであった¹⁹。

「漱石文庫」のマイクロ化も自治体からの働きかけにより実現しているが晴山文書とはその性格が異なっている。その発端は「当面の課題に関する検討委員会報告について」吉田正志(検討

14 「狩野文庫のマイクロ化の計画と経緯」兵永朗(情報管理課長)『木這子』16巻3・4号

15 「『狩野文庫目録和書之部』成立の経緯」

16 「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について(三)」大原理恵『東北大学史料館紀要』10号2015年3月

17 「『狩野文庫目録和書之部』成立の経緯」狩野文庫マイクロ化編集室 p196〔平成4年〕7月16日 第9回狩野文庫マイクロ化編集委員会

18 「貴重図書の閲覧と公開」湯本智子(情報サービス課閲覧第二掛長)『木這子 東北大学附属図書館報』19巻3号(通巻69号)平成6年12月

19 「文化遺産を永遠に－「晴山文書」のマイクロ化－」日影勇(前・大野村教育委員会社会教育主事兼教育次長輔佐)『木這子』17巻2号

委員会委員長・法学部商議員)『木這子 東北大学附属図書館報』20巻3号(通巻72号)平成7年(1995)12月)によれば、「仙台市より平成10年度開館予定の市立「近代文学館」(仮称)に「漱石文庫」をマイクロ・フィルム化して備えたいとの打診」があったことによる。この打診の受け入れの是非・条件の検討が同委員会に付託され、「晴山文書、狩野文庫の例を参考に」事業を推進することが望ましい、という結論になった。平成7年仙台市と契約を結び、3ヶ年計画で進められ、一部はデジタル化も行われた(『漱石文庫』をマイクロ・フォトCD化)片野孝保(情報サービス課長)『木這子 東北大学附属図書館報』22巻4号(通巻81号)平成10年3月)。仙台文学館では平成11年3月28日(日) - 5月26日(日)開館記念特別展「夏目漱石展 —「漱石文庫」の光彩—」が開催された。この一連の事業は大学の貴重図書が所在地の市民に公開されるあり方の一つを示している。ただ、マイクロ化で対処できるのは、閲覧や撮影による破損・劣化であり、原資料の保存についてはさらに検討が必要である。

大学図書館の一般公開と展示事業

上記の「当面の課題に関する検討委員会報告について」には、委員会付託事項の一つとして、学外者の利用が検討されている。

大学図書館を市民に開放することが最近よく話題となる。本学図書館についてもその例外でないが、実際には、現行規定においても一定の枠内で学外者の本館利用が可能であり、そのことがあまり知られていないことこそ当面の改善すべき事柄であるというのが本報告書の趣旨である。

そのため、現行「東北大学附属図書館本館利用細則」から学外者利用関係規定を分離・整理し、学外者も一定の手続きを踏めば容易に図書館本館を利用できることを明瞭にするよう提案した次第である。

もちろん、一般市民が生涯学習等のためにさらに広くかつ容易に図書館本館を利用したいとの要望が今後より高まることもあろう。このような要望に大学図書館としてどう対応するかは、学内各層の意見を十分聴取しつつ時間をかけて検討すべきことであると判断し、本委員会報告には含めないこととした。

『木這子 東北大学附属図書館報』20巻3号(通巻72号)平成7年(1995)12月 p9

その提案を受け、学外者利用の明瞭化が行われたはず(『木這子』20巻4号(通巻73号)平成8年3月p8-9)など)であるが、大学図書館の住民利用を特集した雑誌記事において、東北大学附属図書館本館の「学外者への利用案内」が取り上げられ「正直なところ一般市民にはかなりしんどい」とされている²⁰。こうした大学図書館公開への希望が如何なるところに由来するのか、本稿で検証することはできないが、貴重図書の一般への公開は、附属図書館草創期から意識されていた。貴重図書は保存が優先され研究目的であっても利用を制限するというものであるから、その一般公開のあり方は主として複製の作成や展示によることになる。

大学図書館における展示事業はもとより新たな発想ではなく、大正2年9月東北帝国大学開学記念に展示された典籍の目録が附属図書館の貴重図書目録の濫觴であることは前稿²¹に述べた。

昭和3年4月15日 - 6月3日の間、宮城県図書館等で「東北遺物展覧会」が開催された。『東

20 「【大学図書館の開放度はどんなもん？2】旧帝大の図書館はやっぱり「狭き門」 東北大学附属図書館本館の場合」『ず・ぼん 図書館とメディアの本』4 ポット出版 1997年12月 【特集】どうする、どうなる？大学図書館 住民利用・電子化をめぐる なお、現状ではこの当時より学外者の利用は拡大されている。

21 「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について(一)」大原理恵 『東北大学史料館紀要』8号 2013年3月

【表2】東北帝国大学附属図書館出品資料

※番号は展示の番号 『東北遺物展覧會出品目録』（訂正五版）による

展示場所	番号	展示資料名	展示場所	番号	展示資料名
第五号室	三六	伊達輝宗、伊達政宗、伊達忠宗公記録の抜書（四冊）	机上陳列の部	四六	阿房宮賦（南山和尚）法帖
	四一	伊達家歴代の御朱印及び黒印（切抜貼込）		四七	水西荘帖（山陽書、梅閨画）
机上陳列の部	一八	前九年合戦の事		四八	楽圃（法帖）
	一九	後三年合戦の事		四九	山菴茶寮記（南山書）法帖
	二一	奥羽軍記（三冊）		五一	多賀城碑並に釈文
	二二	巡見使奥羽名勝記		五二	坪碑考證（塩釜神社祠官藤塚知明著）
	二四	陸奥日記		五三	曲江山水画譜（小池曲江著）
	二五	陸奥紀行		五四	陸奥州駅路図（二巻）
	二六	雪の古道（出羽の紀行文）		五六	奥州道の記
	二七	九戸軍記		五七	徒然日記
	二八	最上記（最上義光一代記）		五八	鬼三太残齡記（清悦物語の異本）
	三〇	佐竹軍功記（佐竹家の軍功記）		五九	狂歌陸奥百家撰
	三一	増補米沢事跡考（米沢の地誌）		六二	陸奥国塩竈松島の図
	三二	秋田杉（秋田城主佐竹氏の記事）	第六号室	一一	原田甲斐宗輔の書簡（茂庭左月宛）
	三三	蒲生氏郷記（氏郷の一代記、享保三年の写本）		一〇一	仙台藩御用石巻鑄銭場の絵巻物
	三四	蒲生盛衰記		一〇五	石巻港の絵図（藩政時代全盛期の古図）
	三五	奥州福島城大火の図	第七号室	五	恭懿（田邊希賢）の行状（蘆 東山撰並書）
	三七	保科系図（会津保科家の系図）		六	蘆 東山の手簡（一卷）
	三八	信達風土記（信夫伊達両郡の地誌）	第八号室	一六	後三年役合戦絵詞（模本）一卷
	三九	会津孝子伝		二七	仙台諸家の書翰（六の巻）
	四〇	会津旧事雑考（向井新兵衛撰）		四八	籠居百詠（林子平筆）石版
	四一	会津風土記（保科正之撰、山崎闇斎潤色）	陳列替		名家の詞翰（十二巻）
	四三	松島の図（巻物）			
	四四	孝経（木版）			
	四五	涌谷藩士名簿			

北遺物展覧會出品目録』・『東北遺物展覧會記念帖』（菊田定郷編輯 東北遺物展覧會 昭和8年12月（昭和3年5月序））が作成されており、その詳細を知ることができる。東北帝国大学附属図書館から蔵書を多数出品しており、貴重図書も含まれている。【表2】

東北帝国大学からは法文学部奥羽史料調査部・医学部解剖学教室、また第二高等学校からも出品しているがその多くは出土品（石器・土器・人骨等）である。当時附属図書館員であった常盤雄五郎氏²²はこの展覧会の発起人の一人であり、自らの蔵書も出品している。氏が自ら述べるところでは「関係した展覧會は何十回」²³であったという。

また、附属図書館員の記した『閲覧日誌 自昭和四年五月至五年一二月』（史料館所蔵 図書館/1986/28-2）には、市内の小学校で開催された講演會に狩野文庫蔵書48点と村岡館長架蔵書を出品したことが記録されている（昭和4年9月29日）から、村岡館長もそうした事業に関心があったと思われる。

戦後、附属図書館本館では月例で展示を行うようになった。その目録²⁴は謄写版の簡素なものであったが、細かい文字で展示資料の一覧と解説が詰め込まれている。この展示事業について

22 「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について（二）」大原理恵 『東北大学史料館紀要』9号 2014年3月 注12 参照。

23 「地理書展覧會の追憶」『本食い蟲五拾年』常盤雄五郎 仙台昔話會 昭和31年 p222

24 この目録は史料館にも保管されている。「展観目録」（図書館/1986/88）なお、附属図書館ウェブサイト「展観目録一覧」<http://www.library.tohoku.ac.jp/collection/exhibit/sp/rec/sp-list.html>には昭和38年-47年の展示會の一覧表があり展示資料目録の内容も見ることができる。

は、図書館の広報誌である『東北大学附属図書館月報 図書館通信』及び大学の『学報』に記事が掲載されている。『学報』の記事を見てみよう。

★林子平の文献展観について

附属図書館では、林子平の文献展観を次のとおり行なっている。

日時 八月一日から八月三十一日まで（平日は午後九時から午後四時まで、土曜日は午前九時から正午まで）

場所 本館会議室

林子平関係文献展観目録

A. 著書

一、海国兵談 十六卷三冊（一帙）寛政三年 林子平板（以下略）

『東北大学学報』557号 昭和35年8月15 p4

ここに掲載されている寛政三年版『海国兵談』（延4-1901）は貴重図書であるが、以下各種版本・近代の活版本・村岡典嗣校訂の岩波文庫『海国兵談』に及び、他の著書のほか伝記等も展示し、全体で学報の約1頁を占める記事となっている。『東北大学学報』558号（昭和35年9月1日）では、「貴重書展観について」の記事で「附属図書館では、林子平の文献展観にひき続き、貴重書展観を次のとおり行なう。」として日時・場所・展観目録を示している。国宝2点を含む和漢書貴重図書10点・洋書貴重図書5点の展示で、点数は少ないが本館の代表的貴重書を精選して展示したものである。

だが、『学報』による広報に対しては好意的な意見ばかりではなかった。『東北大学学報』582号（昭和36年9月1日）に『学報』に対するアンケート調査の結果報告「学報の読者調査について」が掲載され、その中に「第五七五号の「フランス図書展観」のフランス図書の目録はあれだけの紙面を用い読者の何パーセントが目を通すか。」（p8）という批判が見られる。

『学報』575号（昭和36年5月15日）では、このフランス図書展観（仙台日仏協会と共同主催）の目録が2頁半を占めている。その隣には「漂流記関係資料展観について」の展示目録が1頁近くを占めているが、アンケートの意見はこれには言及していない。フランス文献の目録だと興味を持つ読者が少ないというのか、2頁を超えるのはあまりに多いというのか、判然としない。『学報』583号（昭和36年9月15日）掲載の「北斎展について」（10月2日～5日開催）では、80点約3頁もの目録が掲載されている。しかし『学報』586号（昭和36年11月1日）の「演劇関係図書展観について」では、目録はなく「解説」が約半頁掲載されているのは、アンケートの意見を意識したのであろうか。ちなみに「演劇関係図書展観」は大学祭に参加している。『学報』588号（昭和36年12月1日）掲載の「奈良絵本・丹緑本・初期色摺本展」（12月14日開催）の「解説」はほぼ1頁を占め、それぞれについて参考文献を紹介する力の入ったものとなっている。

「図書館月例展示会」（『図書館通信 東北大学附属図書館月報』1 東北大学附属図書館 1964年4月 p3）には月例展示会の一覧があり、展示会名（展示題目）・開催年月日・来観者数が示されている。昭和35年7月29日～8月4日開催の「林子平関係文献展」から「徳川家康に関する図書展」昭和39年4月15日～16日開催までである。その展示態勢は次のようなものであった。

世良前館長の着想に発し、段々に体制を整え展示委員会が生まれ、学部教官から希望題目を募り（江戸時代の儒学など）、大学祭に参加し（近世名家筆蹟・演劇関係・科学技術関係など）、また会場も図書館会議室のほかに、閲覧室や川内分館で行われるに至った。主として運用掛と和漢書・洋書両目録掛がこれに当たっているが、和漢書目録掛長矢島玄亮氏の努力は格別である。

来観者は、70名～100名程度のことが多いが、近世名家筆蹟展・演劇関係図書展は大学祭参加であったためか約300名が来観している。

この月例展示は本館の川内移転後途絶えることになった。矢島玄亮氏は図書展観の意義を説きつつ移転後の状況をやや批判的に記す。

今日でもまだ西欧崇拜の思想・行動が著しいが、(中略) その最も甚しかった明治維新後の余燼が感ぜられる頃、本学初代学長沢柳政太郎博士は、遠大な理想の下にこの狩野本を購入、地元にも開放することを願われた。とすればその蔵書は果してよく地域住民に公開されたであろうか。

私は昭和26年から同49年の間に凡そ108回(敗戦後夥しく来館した欧米人にも展示したがそれは含まれていない) 図書の展観を行ったが、その資料の大半はいつも狩野本であった。展観の都度資料を求めて入庫すると、どこからともなくその図書が寄って来る感であった。かくして私は35年7月から47年1月まで、月例の図書展示会を開催し得たのである。(中略) 昭和47年夏にはこの片平丁の図書館は川内に移転された。(中略) メーンホールに造られた図書展示棚も甚だ立派であるが、私の退職するまでの約八年間にこの陳列棚は何回利用されたであろうか。片平丁は地の利を得ていたから月例図書展示会も辛うじて成就し得たのであったろうか。

「狩野文庫とともに」矢島玄亮

『図書館学研究報告』16 東北大学附属図書館 昭和58年12月 「蔵書の展観」 p15-16

郷土資料の発掘紹介に努めた常盤氏と西洋崇拜への批判を掲げる矢島氏の間には同じ市民対象の展示であっても意識の相違がうかがわれる。公開展示に掲げられる理念は一様では無い。「資料を求めて入庫すると、どこからともなくその図書が寄って来る」という矢島氏の言葉は狩野文庫の特色をよく表している。「狩野文庫攷(三) - 展示会に見る狩野文庫 -」石田義光(『東北大学附属図書館研究年報』28 東北大学附属図書館 平成7年12月)には大正14年から昭和49年までに開催された展示会の一覧が掲載されているが、昭和47年は1月・6月に、昭和49年は8月・9月・10月に展示が行われている。同論は狩野文庫についての考察が目的であり「資料の大半はいつも狩野本」という矢島氏の記述を裏付けるものとなっている。

この月例展示においては、テーマによっては数点の貴重図書が含まれている場合もあるが、「貴重図書展」と称する一連の展示も月例展示の一環として行なっている。別置本を分類ごとに網羅的に展示したもので、合わせれば貴重図書の組織的な展示となりその点数からも注目すべきものである。目録の内容は昭和36年度『別置本目録』の記述に西暦を加えたものであり、『別置本目録』の再配布の意味を帯びるもので、電子版目録はなく複製も容易ではない当時においては、こうした目録配布の持つ意義は軽視すべきではない。

貴重図書展(其の1)(展観目録第85号) 昭和42年9月20日(水)、21日(木)

・狩野文庫より18点

貴重図書展 其の2(古写本)(展観目録第91[92]号) 昭和43年4月10日(水)、11日(木)

・狩野文庫及びその他より30点

貴重図書展 其の3(日本古刊)(展観目録第94[95]号) 昭和43年7月10日(水)、11日(木)

・狩野文庫より 43点 参考展示1点

※漢籍古刊本は「漢籍古版本展」(展観目録第82号) 昭和42年6月7日(水)、8日(木)において展示
貴重図書展 其の4(準古刊)(展観目録第105[103]号) 昭和44年4月8日(火)、9日(水)

・狩野文庫及びその他より 27点

貴重図書展 その5 原本、稿本(儒家、釈家1)(展観目録第[109]号) 昭和44年10月14日(火)、15日(水)

・狩野文庫より 40点

貴重図書展 その6 原本稿本(儒家・釈家二)(展覧目録第〔116〕号) 昭和45年7月7日(火)、8日(水) ・狩野文庫より40点

貴重図書展 原本・稿本(3) 和学者(展覧目録第〔123〕号) 昭和46年5月11日(火)、12日(水)

・狩野文庫及びその他より 34点

『東北大学学報』840号(昭和47年6月1日)に掲載された「信西入道に関する図書展」(6月13日・14日開催)の解説は次のようなものである。

平安朝時代鳥羽・崇徳・近衛三朝に歴仕し、後白河帝の黒衣宰相として手腕を振った藤原通憲入道信西(-1159)は、只今NHK大形放映「新平家物語」に登場、大活躍をしたが、彼はいかなる人物であつたらう。ここに館蔵文献を陳列して、その人物をうかがって見ることにした。陳列の図書等によって彼の多才なことがわかり、当代における異常人であつたことが納得されよう。

これで全文であり、目録はない。展示目録(展覧目録第〔130〕号)は、

信西入道関係図書展目録 <http://www.library.tohoku.ac.jp/collection/exhibit/sp/rec/sp-130.html>

で見ることができる。なお、この報知記事掲載時期は、『学報』巻頭に「本学にある貴重文献の紹介」を連載していた頃²⁵である。附属図書館は学内広報活動に相当に注意していたものと思われる。

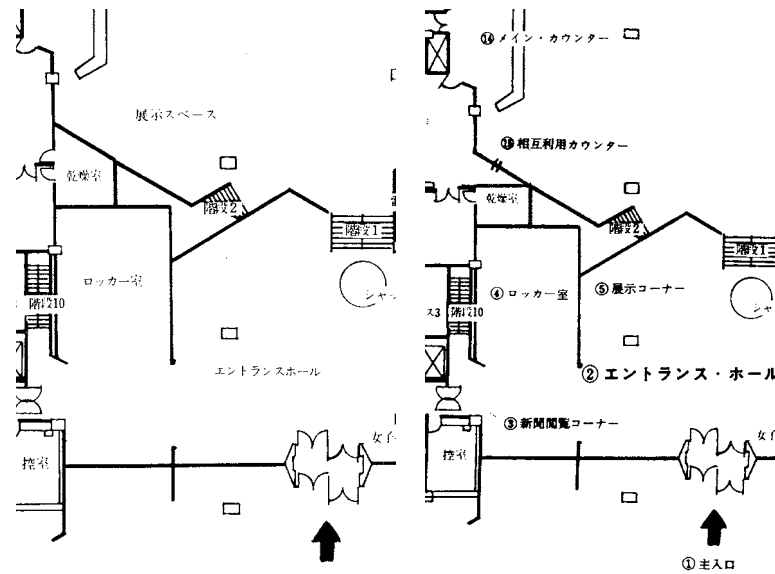
上記矢島氏の文章にある川内本館の展示スペースは、設計段階と実際では位置が異なっている。『図書館通信 東北大学附属図書館月報』82(1971年1月 p6)の新営本館建築設計平面図では、「展示スペース」は入口から階段を上った内側、メインカウンターの脇の方に設定されているが、『図書館利用ハンドブック』(東北大学附属図書館本館 1974年)では、階段の手前、エントランスホールの一隅にあって【図2】、その後改修が行われたが、現在に至っている。ある程度以上の規模の展示は、視聴覚室などが会場となった。

平成6年11月11日-15日、附属図書館内で貴重図書の比較的規模の大きな展示が行われている。これは、書庫改修・環境整備記念事業として行われたもので、国宝2点を含む約150点が展示された。すべてが指定された貴重図書ではないが、狩野文庫・漱石文庫のほか櫛田(民蔵)文庫・西藏大蔵経等が展示された²⁶。

平成5・6年頃の貴重図書の利用状況については、「貴重図書の閲覧と公開」湯本智子(情報サービス課閲覧第二掛長)、『木這子 東北大学附属図書館報』第19巻第3号(通巻69号)平成6年12月)にまとめられている。閲覧・複写(撮影)・館内展示・展示貸出等であるが、閲覧利用統計で重要なのは、漱石文庫とその他の貴重図書を分けていることである。平成5年度貴重図書閲覧利用は、一般の貴重書は25人771冊、漱石文庫は49人791冊である。また平成6年度4月-10月では貴重書30人172冊、漱石文庫は65人497冊である。漱石文庫を区別せずに集計するとその多さが見えにくく、貴重図書利用の実態が歪んで理解されるおそれがある。ただし、漱石文庫の利用はマイクロフィルム作

25 「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について(三)」大原理恵 『東北大学史料館紀要』9号 2014年3月 p56 注12 参照。

26 「附属図書館(本館)書庫改修・環境整備記念事業」2. 貴重図書公開展示会の開催について(『木這子 東北大学附属図書館報』19巻3号(通巻69号) 平成6年12月)参照。また『東北大学附属図書館所蔵貴重図書公開展示会目録』東北大学附属図書館(会期:平成6年11月11日~15日)が作成され、史料館にも所蔵(現在閲覧室に配架)されている。



【図2】 左：【計画】『図書館通信 東北大学附属図書館月報』82 1971年1月 p6
 右：【実際】『図書館利用ハンドブック』東北大学附属図書館本館 1974年 p2

成後変化したものと思われる。また、この時期は利用者自身による撮影が行われていたため文中にそれについての言及があるが、現在は専門業者による撮影のみとしている。

本館2号館の貴重書展示室では、約35点の貴重書を展示し、平成5・6年の見学者は1930人となっている。上記の平成6年11月11日－15日の公開展示の場合は入場者約2000人である。それぞれの方法の効果も興味ある問題ではある。

しかし、担当の掛が置かれたにもかかわらず、貴重図書とそれに関する図書館業務は、その存在が十分に認識されていなかったという。

本学の貴重書はリクエストに応じて、全国の研究者の閲覧に供されるとともに、本学を訪れた多くの大学関係者、高校生、一般市民等に対して展示されており、毎年数点は各地で行われる展示会への出陣など広く公開されている。これらの業務は、図書館業務の重要な部分として積極的に行っているにもかかわらず、地味なサービスとして捉えられており、貴重書の存在すら学内でも充分には知られていない。

「貴重図書の閲覧と公開」湯本智子（情報サービス課閲覧第二掛長）

『木這子 東北大学附属図書館報』19巻3号（通巻69号）平成6年12月 p5

貴重図書の展示・公開、高校生の訪問受入などは、大学図書館業務の中では、従来必ずしも重要視されず、図書の安全保管、館内の静粛保持、職員の労力負担などの点から消極的となる場合も無いではない。

大学と市民・学外者の具体的接点、接触の場として、大学の教育・研究への理解者、あるいは支持者を増やしていくことに少なからず、貢献しているこれら図書館業務を正當に位置づけ、その充実に務めることが肝要だ。

「大学図書館への期待」廣田史郎²⁷（事務局長）（『木這子』同上） p3

前者は担当の掛長の発言だが、後者は大学の事務局長によるむしろ図書館への要望である。広報のための展示事業は、逆説的ではあるが業務としては目立たず、確かな位置付けがなされていなかったということになる。そして貴重図書の存在自体にも同じ傾向、重要であるが認知

27 廣田史郎は当時東北大学事務局長（平成4年7月－平成7年9月在任）

されていないという問題があった。

『貴重本目録』作成計画案（昭和62年11月）

附属図書館事務に保管されている貴重図書関係の書類の中に昭和62年11月5日付「貴重本目録作成計画（案）」がある。この計画案は、使用ソフトや作業量についても具体的に記してあるが、目録作成計画というよりも、データベースソフトを用いた最初の貴重図書目録電子化計画といえ、さしあたっては検索や資料の追加を容易にし、将来的には情報の拡張を企図していた。貴重図書についての制度が整備されつつある時期であり、同時に東北大学附属図書館情報処理ネットワークシステム（T-LINES1）が稼働したのが昭和61年12月であるから、目録の電子化が図られるのはその双方の流れに沿っていた。計画書には次の項目が示されている。

1. 趣旨 2. 使用ハード 3. 使用ソフト 4. 処理概要 5. 対象
6. 処理量概算 7. 経費 8. 主題分類の付与 9. 内容解題の作成 10. 文字

「1. 趣旨」には目録の作成理由が示されている。その理由は、昭和36年『別置本目録』刊行後の増加分を統合すること、多様な検索を可能にすることである。今後継続的な改訂・増補を行えるようになり、将来的には、簡単な内容説明を付した解題目録を作成できるように拡張性をもたせることを目指している。

使用ハードは「パソコン PC-9800」使用ソフトは DBASE III とされていて、当時既存のものを使用することになっている。T-LINES 目録システムを使用しない理由は「学情システム入力を前提とした DB 作成という現行の原則に反する。古典・狩野文庫等が入力されていない DB に、貴重本だけを入力するのはアンバランスである。」とする。しかし「将来的に T-LINES システムへのデータ移植を考え」る。

「4. 処理概要」では入力する項目を示す。昭和36年版目録および昭和51年版増加分リストをもとに次の項目を入力するとする。

- ①書名及び巻数 ②書名ヨミ* ③編著者名 ④編著者名ヨミ*
- ⑤刊写印記その他（和漢書）、出版地・刊年（洋書）
- ⑥冊数 ⑦配架記号* ⑧主題分類記号* （*印の項目が検索キー）

対象は約1000点、一人で一日25件入力、40日で1000点の入力完了。校正を合わせて約2ヶ月で終了。アルバイトの人件費2ヶ月分が必要となる。

「8. 主題分類の付与」には「現行の配架記号は、正確には主題分類ではない。各貴重本に主題分類を付与する作業（および日数）は別途計画する必要がある。」とする。これは貴重図書目録は、資料の貴重性（古写・古刊等）によって分類されているため、内容から検索するには不便であるためであろう。

「9. 内容解題の作成」は新規に作成することになるのだが、「各貴重本の内容解題については、その作成が専門的知識を必要とすることから、今回の計画とは別に作業計画を作成する必要がある。」としている。内容解題は「3. 使用ソフト」で「4千文字程度」としているのだからかなり充実したものを想定したと思われ、データベースに入力し活用することを考えていた。

「10. 文字」は、「パソコンで入力できない漢字については新字体を代用する。該当する新字体がない場合は空白のままにしておき、後で手書きする。」とする。

解題の作成には課題が多い。貴重図書に関する情報の蓄積はさまざまな試みがある。例えば

附属図書館広報誌『図書館通信 東北大学附属図書館月報』『木這子 東北大学附属図書館報』には貴重図書の紹介記事が見られるが、平成7年12月から『木這子』では新たな企画として「シリーズ 貴重図書」と称する貴重書²⁸の紹介を断続的に掲載している。

その執筆者は主として学内教員であるが、「中村正直訳『西國立志編』、『西洋品行論』、『自由之理』をめぐって」阿野文朗（『木這子』第20巻第3号（通巻72号）平成7年12月）に始まり、「シリーズ 貴重図書24」にあたる「鉱山の仕事はきわめて誠実な職業である－アグリコラ『デ・レ・メタリカ』－」小川知幸（『木這子』第32巻第2号（通巻119号）平成19年9月）まで続いた。「東北大学附属図書館所蔵 貴重絵図のデジタル化とは－貞享元（1684）年「絵入江戸大絵図」から－（シリーズ 貴重図書21）」千葉正樹（『木這子』第25巻第4号（通巻93号）平成13年3月）までは、毎号連載されていたが、その後掲載は稀になる。

それは、こうした企画の困難性をものがたるものでもあろう。上記の「東北大学附属図書館所蔵 貴重絵図のデジタル化とは」や「東北大学附属図書館所蔵 マルクス／エンゲルス貴重書閲覧システムについて（シリーズ 貴重図書23）」久保誠二郎・窪俊一・大村泉（『木這子』第28巻第2号（通巻103号）平成15年9月）等は電子化が中心的話題となっている。

これらの記事の多くは、残念ながら著作権処理の関係で電子版『木這子』<http://www.library.tohoku.ac.jp/about/kiboko/kiboko.html>では閲覧することができない。

昭和62年「貴重本目録作成計画（案）」は、実現しなかったようである。計画案には電子化初期特有の問題も見受けられるが、この計画から次の貴重図書目録に期待されるものの骨子を読み取ることができよう。平成8年4月の「別置本目録増改訂プロジェクト」設置の際にどのような構想があったのか、次稿において述べる。

※引用にあたって、原文の漢字の字体・活字の書体を改め、傍線・ふりがな等は省略したことがある。また「。」は「、」「。」等に改めた場合がある。〔 〕内は筆者の推定による補記である。文献の刊行年は原則として奥付等に従い、西暦・元号の統一はしていない。

28 「貴重性」をもつ資料を対象とし、すべてが指定された貴重図書とはなってるわけではない。